岩のような冒険者

語り人形

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

その者は、冒険者というにはあまりに異質過ぎた。

大きく、分厚く、重い、岩塊を彫り上げたような全身鎧を身に纏い、大雑把過ぎる大槌と大盾を携えていた。

その姿はまさに、〝岩のような戦士〟であった。

目次

兎も走れば岩に当たる ―― 1
冒険者、そこのけそこのけお岩が通る ―― 9
岩の名は ―― 18
岩竜が如く ―― 31
兎追いしかの岩 ―― 40
岩が来たから帰ろうか ―― 59
ある日森の中、岩と恐竜と… ―― 68

兎も走れば岩に当たる

薄暗く、仄かに灯る闇が立ち入る(侵入)者を不安に誘い、奥先からひんやりと、渇いた唸りが無作法(無法)に踏み入る探索者達の意気を緊張に縮ませる無限の魔窟。

獰猛な現地生物(モンスター)達が剣呑な眼光を走らせ、密かな息遣いを震わせて闊歩する中、突如〝ソレ〟は現れた。

「うあわわわわぁぁぁぁ!!」

それまで冷々とした静寂に満ちていた洞窟内でけたたましく、奇声の叫びを上げて疾走してきたのは小柄な人間(ヒューマン)。返り血か、少年の正面上半身は真っ赤に染まり、青い顔立ちも今は髪を含めてどす黒く濁った赤色だ。

狂気を感じさせるまでの逃げっぷりに、遭遇したモンスター達でさえ驚愕に唖然と見逃す程の走りで魔窟、ダンジョンを爆走する少年。

場所が場所だけに、よほど恐ろしい目に遭い必死に逃げてきたのだろうと、誰もが始めに抱くであろう状況。しかし、奇妙にも前方を向く少年の頬は緩みきり、見開いた深

紅の瞳は情熱に浮かされた眼差しだった。
現在、少年ー齢１４の若き新人冒険者、ベル・クラネルは人生初にして最大の恋に遭遇し逃走中。

……

「アイズ、アイズ・ヴァレンシュタインさん！」
みっともなく走りながらも僕は口に出さずにはいられなかった。ミノタウロスから助けてくれたあの人の名前を呟くと、抑えきれない恋心が止めどなく溢れてしまう。
美人美少女達との出会いを求めてオラリオにきた僕は今日、夢の一つが叶った喜びに両足のブレーキは効かず、爆発する程の想いを糧に地上まで邁進する。
だからという訳ではないが、不注意になっていた僕は〝ソレ〟に気付かずぶつかってしまった。
「ゴバァッ!?」
曲がり角を曲がった瞬間、ビターンッ！　とベルは勢いよく真っ正面からぶち当た

り、渇いた衝撃音が洞窟内に響き渡る。まるで壁にぶつかったかのような硬い衝撃と鈍い痛みが少年の全身を襲い、呆気なく地面に背中から倒れ込む。それでも先の燃える興奮と持ち前の根性を総動員してなんとか無様にも気絶する未来は避けることは出来た。

「ッ、痛ッッッッ！　一体何が……!?」

滲む痛みを堪え、涙声になる少年。幾ら我を忘れて走っていたとはいえ、ベルはこの地上までの規定ルート、それも何度か往復した上層の道のりぐらいはしっかり覚えている。うっかり行き止まりのルートに入り込んだ覚えは無い筈だった。

他の冒険者にぶつかった!?　でも前に壁があったような……？

通路を曲がった瞬間、確かに最初に目に飛び込んだのは視界一面の灰色の壁だった筈、と眩む頭を抑えてベルは短い記憶を振り返っていると、ドスッ、ドスッ、重い足音を聞いてもう一度前方を見上げる。

そして反転した〝ソレ〟に気づき、呆然とした。

眼前にそびえるのは灰色の岩壁ーではなく、軽く２Ｍを上回る巨躯をした岩塊の如く屹立する一人の人間？　らしき存在だった。

岩塊をそのまま鎧の形に削り彫ったような、超重量の重装鎧（フルプレート）の一式で全身が隈無く覆われており、種族はおろか性別の区別がまるでつかない。

肩に抱え持つは小柄な自分を容易く潰せそうな、黒光りする、太く、重い、反りのあ

る巨大な大槌。
それと自分がぶつかったであろう、背丈に匹敵する大きさを背負った分厚い岩の大盾。
オラリオに来て日が浅いとはいえ、まず地上の都市、それも自分以外の冒険者（同僚）達の装備と比較しても異質過ぎる格好に、ベルは一瞬岩のモンスター？　と勘違いしてしまいそうだった。

ー〝岩のような戦士〟ー

かの者の顔はバイザーで下ろされており、岩兜の中の表情は伺えないが、沈黙したまま自分を見下ろしているであろう存在に、そんな言葉がベルの脳裏に浮かぶ。
先刻、ミノタウロスに襲われていたところを救ってくれた金髪の少女とは異なる視線を、〝岩のような戦士〟に向ける。
この時、ベルは圧倒されていた。
思い出すのも恐ろしい牛頭の怪物、それを華麗に倒して見惚れてしまった美少女とは違う、存在そのものが圧倒的に段違いな目の前の戦士に、ベルの目には幼き日に幾度も読み返した絵本に登場する英雄達の姿が重なった。

時を忘れて見入ってしまうベルに、〝戦士〟は動いた。

ドシンッ！

「！」

不意に〝戦士〟は肩に背負っていた巨大な大槌を地面に下ろした。地面に置いた際の音だけで、その大槌が見せかけでなく圧倒的重量を秘めた武器であることを少年に伝える。

次に、〝戦士〟は我に返ったベルに、〝空いた片手〟を伸ばした。

（ナ、何?!）

岩と鎖のガントレットを装着した巨腕が自身に迫り、ベルは混乱する。へたり込んだ少年の視点から覗けば、まさに背高い岩山のような巨体がこちらに迫る様子は片手といえど、とりわけ冒険者になって未熟も未熟な少年には、その動作だけで重い圧を強く受け取ってしまったからだ。

これが通常時なら多少の困惑で済んだかもしれないが、立て続けに起きた出会い（ハプニング）にベルの精神は緊張と興奮にビンビンに張り詰めており……

「ごっ、ゴメンなさーいッッッッ!!」

まともな思考は録に働かず、ベルは相手がぶつかったことに腹を立ててしまったと捉えてしまい、立ち上がるやいなや、戦士の真横を現れた時同様に脱兎の如く奇声を上げ

て通りすぎ、そのまま後方に走り去った。

「……」

中途半端に伸ばされ片手が虚しく空に止まり、少年が逃げ去った自分の背後に視線を向ける。そのまま暫し一言も発さず、まさに岩のように硬直して屹立する戦士。

……一体何事か？

戦士……彼は心の中で呟き、ゴトッと首を傾げる。

探索を終えて、地上に帰還していた途中であった。上層を歩いていたら、突然背後から走ってくる足音が聞こえ、モンスターかと思い振り返ろうとしたまさにその瞬間、闖入者は彼の背負っていた大盾に自分から盛大にぶつかって倒れ込んだのだ。

振り返って見下ろせば、その者はモンスターではなく自分よりずっと背が低く、歳は十代半ばと見て取れる若き冒険者だ。上層であることと自身の装備よりも遥かに軽装な姿から判断するに、新人だろうと彼は当たりをつける。

何があったのか上半身が血らしきどす黒い赤で染まり、重傷者かと思ったが、少年は呆けたように自分を仰ぎ見ているので、恐らく返り血なのだろうと判断し、密かに胸を撫で下ろす。

少年に何が起きたのか詳細は不明だが、とにかく少年を起こそうと決めた彼は先ず、自分の相棒である大槌ー『大竜牙』を地面に置く。そして空いた手をそっと少年に差し出してみれば、彼の意図とは裏腹に少年は怯えに怯えた子兎の如く謝罪の悲鳴を上げ、逃走したのだった。

純粋な善意で動いてみたら、まさかの相手が逃げ去ってしまったという初めての事態に、どんな戦場も冷静に思考してきた彼も、この時ばかりは何が起きたのかまるで思考が追い付かず、間抜けな状態で硬直してしまったのだ。

この地では自分の格好がひどく特異なことは既に重々承知しているものの、まさかそれが原因で逃げたとは露にも思わぬ彼はとりあえず気を取り直して大竜牙を再び担ぎ、少年が逃げ去った先、オラリオ（地上）を目指してゆっくりと、重い足音を迷宮に響かして進むのだった。

世界に名だたるオラリオの冒険者と言うには、余りに戦士すぎる姿

大きく、分厚く、重い、鎧というには余りに岩塊すぎる重鎧

並みの冒険者では持ち上げることすらやっとな程の大槌、大盾

彼の名はハベル。

このオラリオで知らぬ者はいない、〝岩のような冒険者〟である。

冒険者、そこのけそこのけお岩が通る

広々と、鮮やかな青に染まった空。
遥か天空の先、この世界の超越存在達が住まんと云われる天界に届かんと言わんばかりに、雄大にそびえるのは白亜の巨塔【バベル】
オラリオの象徴（シンボル）である一方、謎多き未知が広がる深淵の穴を塞ぐ『蓋』としての役目を果たすその巨塔の足元では大勢の種族が広場を行き交っていた。
人々の大半が冒険者達で構成され、各々が様々な装備姿をして中央広場（メインパーク）を渡る足音が不規則に響き渡る中……
……ズシンッ、ズシンッ、ズシンッ、
地響きのように重く、低い、足甲の足音をゆっくりと規則的に響かせて広場を横切るのは一人の存在だった。現在この場にいる冒険者達の中で最も目立つ巨体、その体躯に合った重厚な全身鎧（プレートアーマー）と巨大な武器防具の武装。その〝特異な外見〟も相まって、恐らく十人中十人が一度見たら忘れられぬであろう存在もまた、このオラリオでは数多く存在する、〝ありふれた〟冒険者の一人だ。
（……久方ぶりの地上、実に心地良し）

のんびりとした足取りのまま、顔全体を隠した兜の覗き目（スリット）から上空を仰ぎ、そうハベルは実感する。

燦々と暖かく地を照らす太陽、清々しく吹き抜ける涼風、生気に満ちた人々、およそ殺意と血が薫る地底では決して味わえない地上の空気を彼は堪能し、それまで纏っていた緊張の衣を脱ぎ捨てるのだった。

感慨に浸る一方で、そこに偶々生まれて初めて迷宮都市に来た冒険者志望の青年が横を通り過ぎる。端から見たら何を考えているのかフルフェイスの兜により中の表情が全く伺えず、ただ黙々と地響きを伴いつつ、悠々と緩歩する彼が気になり、青年は丁度通りがかっていた男性の冒険者を呼び止めてハベルについて尋ねた。

「な、なぁちょっと良いか。あのでけぇ全身岩の塊みてぇな奴は一体何なんだ？」

「ん？　なんだ初めてオラリオ（ここ）に来たのか？　……あのデカいのはハベル、【岩胄戦士（グレートロック）】の称号を持つ上級冒険者だ。此処じゃ割りと名が知られてるからな、そこらで耳を済ませや噂の一つや二つは拾えるぞ」

「ハベル、あの〝岩のハベル〟か!?」

ストリートで一際目立つハベルの圧倒的存在感に目を奪われつつも男の説明を聞き、青年は来る途中聞いた話を思い出す。

曰く、２Ｍを超すその身体を巨岩の外装で包み、ひとたび戦えば大盾でもって凶悪な

モンスター達の猛攻を防ぎつつ、敵の頭上に大槌を振り下ろし、重い一撃を返す巨漢の冒険者。

曰く、決して怯まず、後退せず、敵としたものを必ず叩き潰す岩のような戦士。

武装の全てが重量級故に、機動力は一般の冒険者よりもずっと劣るものの、某道化ファミリアの小人（バルウム）曰く、ウチの主力壁役（ガレス）に匹敵する洒落にならない程に高い強靭と防御力、攻撃力で大抵の不利な状況は覆すと云う。そんな清々しいまでの真っ正面（ド）から（筋）ゴリ押（イル）しする（タス）様に一部の神々には感動を与え、刺激を受けて彼の信奉者（ファン）となる冒険者も少なからずいるという。

周囲では男の言った通り、そっとハベルに視線を向け、ひそひそと【岩胄戦士（グレートロック）】に関する噂を囁く者達がそこかしこにいた。

「信じられる？　あの見た目でＬｖ２なのよ！」

「Ｌｖ１だった時に単独（ソロ）で階層主（ゴライアス）と戦り合ったと聞いたぞ。……ホントか？」

「ああ、リヴェラの連中の何人かがその時の様子を見たと証言してるから事実だろう。そいつらが言うには彼奴がゴライアスの猛攻を真っ正面から食らいやがっても、耐えまくってびくともしなかったらしいな」

「へっ、どうせあの無駄にゴツゴツした鎧と、かりんとうみてーな武器の性能のお陰だ

ろーが。デカブツ自体の実力は大したことないんじゃないか」
「さあな。只、そう言って絡んだ奴らが悉く全員返り討ちにあったのは確かだ。その中に第二級冒険者も混ざっているとか」
「そもそもアイツは本当に人間（ヒューマン）なのかよ。やっぱり岩石のモンスターだったりしないのか？」
「あんな化け物耐久のモンスターが居てたまるもんかよ。小さくなった階層主じゃねーか」
　等々、口々に呟く彼らを尻目にハベルは真っ直ぐ歩く。
　ハベルが現在渡っているストリートには当然一般市民含め、それなりの数の冒険者達が往来しているが、彼は群衆を避ける真似はせず、ぶつかることを気にする素振りもない。理由は単純明快、彼らの方から勝手にハベルの進路から外れ、道をつくるからだ。
　というのもハベルの外見は一言で表せば人の形をした巨岩、巌（いわお）の化身とでも言うべき様相。それに加え大の人間を一振りでミンチに変える大槌を肩に載せ、威風堂々と闊歩する様はまさしく歴戦の大戦士が如く。そんな者が目の前から来れば市民はおろか、普段は道を譲らぬ気性の荒い冒険者でさえ小動物のように本能的に避けさせ、喧嘩を売る気概さえ失わせる。
　無論ハベルにそのような意図は全く無いが、かといって本人にどうにか出来る魔術や

指輪なんて術は持ち合わせていなかった。

……ズシンッ、ズシンッ、ズシンッ

大勢の人々の注目を浴びつつ進む岩山、ハベル。

少しばかりの時が経ち、やがて彼の前に一つの大きな石造りの神殿が現れた。神殿の名は【ギルド】、オラリオ及び都市に住む全ての冒険者達を統括する管理機関の総本部を視界におさめ、向かおうとした矢先だった。

「エイナさん、大好きー!!」

声高々に叫んでは駆け出す少年の姿を目に入った。つい最近、迷宮内で聞いた覚えのある似た声と背格好、エイナという知人の名にハベルは反応する。

『あの時の血濡れた者……エイナ殿の知り合いか?』

元気良く群衆の中を走り去っていく白兎を眺め、ハベルはそう独り言つ。ギルドの方に視線を向けると入り口付近にその彼女の姿を見つけ、進む。

ハベルが近づくと、その重々しい足音と目立つ外見にエイナは直ぐに気がついた。

「あっ、ハベルさん。いつからこちらに!」

『つい先刻。貴公にダンジョンの帰還報告を告げに立ち寄ったところだ』

「そ、そうですか。ご足労ありがとうございます。……それで、今回は何処まで探索を?」

『２４階層』

至極平然と攻略階層を答えるハベルに、エイナは頭痛を覚える。２４階層といえば下層手前、中層最後の階層だ。第三級冒険者のハベルは１ヶ月間程、１８階層にあるリヴェラの街を拠点に中層を（独りで）探索してきたと説明する。

「……中層は上層と比べてモンスターの質も数も段違いです。問題なかったのですか？」

『特段支障は無い。確かに彼奴らは頻繁に出現する上に、特殊な能力を持つ個体も存在する。囲まれると面倒ではあるが、我が歩みを止めるには至らず』

具体的には大竜牙（高火力）と岩の大盾（圧倒的強靭）、重装鎧（防御力）による、耐えては果敢に攻める堅実な戦法で潜り抜けたとのこと。

堅実的な戦いはエイナとしても望ましいのだが、そんなアホな事、誰もが出来る訳ではない。普通なら烈火の如く説教するところだが、既にこの重戦士は冒険者になった初日から階層主ゴライアスと交戦、１８階層に到達するという前代未聞の大事件をやらかしているので、怒りは十周回って、朽ちた竜状態だった。その後度々、当たり前のように中層域を探索するハベルに最早エイナは呆感と諦感しか覚えざるえなくなった。

なお、何故そのような暴挙に出たのか理由を問いつめたところ――上層では物足りなく、強敵を求めて深く潜っていた――とのこと。

「私はもうハベルさんのアドバイザーではありませんが、本当に気をつけて下さい。本来、あそこは第三級冒険者一人で探索するには危険すぎるのですよ」
『心配の念、感謝致す。されど危惧は不要、我が未熟であった以前と比べれば、遥かに敵は柔く、鈍い、遅れは取らぬ。――してエイナ殿。話は変わるが先程、貴公の名を叫んでいた少年は知り合いか？』
「ちょっ、聞いてたんですか！　うぅ～っ、恥ずかしいので忘れて下さい！」
少年の告白を知人に聞かれていた事実にエイナは顔を真っ赤にさせ、羞恥に身悶えた。

……

冷静になったところで改めて聞くと、かの少年の名はベル・クラネル、約半月前に冒険者になった者だという。所属ファミリアの主神はヘスティア、ハベルの主と神友関係にある神であり、ハベルも小さき女神のことは知っていた。
『ふむ、なるほどミノタウロスに襲われていたと。牛頭よりは劣るとはいえ、羊頭程度の強さは持っておるからな、慣れぬうちはきつかろう』
「何の話かは解りませんが、そもそもＬｖ１で交戦できる相手ではありませんからね。

貴方はもっと自分が周りと際立ってズレていることを自覚して下さい……」

ハベルが初見で遭遇した際は大竜牙一振りでミノタウロスを頭から叩き潰したが、そのような行為が行えるのはＬｖ３以上の者のみ、レベル差とは一体……とエイナは激しく疑問を感じせざるえない。

そうして、あわやミノタウロスに殺されるところを運良く他の冒険者に救助、しかし恥ずかしさでその恩人から逃走を行ってしまった。その後、地上目指して帰還途中だった自分と遭遇したのだろうとハベルは推測した。

「ベルくっ……こほんっ、……クラネル氏から貴方についての情報を聞かれたので、勝手ながら簡単にプロフィールを紹介しましたが、よろしかったでしょうか？　それとクラネル氏はあなたに逃げたことを謝罪したいとのことですが……」

『構わん。ヘスティア殿の眷属なら人間性に問題無かろう。我が主との縁も深い。いずれかの者とまた巡り会う機会は訪れようぞ』

ズシンッ、ズシンッ、ズシンッ、

エイナとの会話を終えたハベルはその後、ギルド内で戦利品の魔石を換金し終え、ずっしりとした重みのある金袋を大盾に隠された鞄に仕舞い込むとギルドを発った。

彼が通る先では人海が割れ、つくられた道をハベルは渡る。
畏怖と尊敬の視線が一心に集う様はまるで、凱旋かのようであった。

岩の名は

陽光届かぬ黒き森の中
湖獣（ヒュドラ）が棲まう湖の湖畔
監視なき閉ざされた塔

その内部、壁面に備え付けられた篝火が灯す螺旋階段の奥底で〝彼〟はじっと、岩のように屹立していた。

彼が何者なのか、何故そこに幽閉されているのか、最早知る者は久しく、彼に尋ねることも叶わぬ。なにせ当事者である彼自身すら覚えておらず、その理性も遥か昔に忘却の闇へ溶けていたのだから。

外では火は陰り、使命を抱く者達が誘われるようにして神の地に赴いていることも彼には関係無く、隔絶された塔の中が世界の全てだった。

誰からも知られず、世の終末が訪れるまで、永遠に彼は時が止まった石の牢屋に隔離される――その筈であった。

コツッ、コツッ、コツッ……

本来なら扉で閉ざされ、誰も入れぬ筈の塔の上階から控えめな足音が静寂を破った。

やがて階段から姿を現したのは一人の呪われた〝不死人〟

一般的な放浪者が纏う身軽な軽装姿に、反りのある薄く細長い刃を持つ刀剣（シミター）と小さな円盾（バックラー）を装備した戦士だった。

侵入者の存在に気づいた彼はそれまで微動だにしなかった身体を揺らし、手に持つ大槌（大竜牙）を両手で担ぐ。敵が何者なのかなど考えない。彼はただ〝亡者〟の本能に従い、戦士の持つ命（ソウル）を貪欲に求めるのみ動く、自我なき存在故に。

そして、見張り塔の底で二人の戦士の死闘が始まった。

石床を砕く勢いで迫り来る大槌を戦士は身軽な動きで掻い潜り接敵、素早くシミターを振るう。しかし堅牢な岩の鎧にはまるで刃が立たず、表面に浅い傷をつけるのみに留まった。

一方で彼の身体は古き闘いの記憶に沿って動き、即座に圧倒的重量が秘められた大竜牙の返しを放つ。その一撃は戦士を盾ごと叩き潰し、地に沈め、瀕死に変えた。伏した戦士はなんとか起き上がろうとするも、彼は何の感慨も抱かず戦士の真上に止めの一撃を無慈悲に落とす。

あっさり終わったかに見えた闘いはしかし、それで終わりでなかった。岩の如き彼よりも遥かに軟弱な戦士は、その後何度も挑んだ。彼に何度も大槌に潰されようと、その命（ソウル）を無惨に散らされようと、戦士は幾度の死を重ねて彼に挑戦し続けた。最初は無様に

沈められるだけだったが、幾つも死を糧にやがて戦士は彼との闘いに順応し、効率的に〝攻略〟し始めたのであった。

二撃必殺の威力を秘めた大竜牙の振り下ろしを見切り、回避（ローリング）、そしてがら空きとなった背後に致命の一撃（バックスタブ）を叩きこむ。亡者になり思考は溶け消え、単純な攻撃（ワンパターン）しか出来なくなった彼には対応出来ず、やがて背後を取られるを繰り返すこと数回、最後は真っ正面に立つ戦士に大竜牙の攻撃を弾（パリィ）かれ腹に強力な一撃を貰い、ついに限界を迎えたその巨体は地に倒れ伏した。

こうして、かつては英雄と謳われ――しかし亡者となってしまったことで、名も姿も忘れてしまった友の手により見張り塔の底に隔離された彼の最後は、無名の不死人に敗れさったことでその永き生涯に幕を閉じたのであった――――。

～～～

鬱蒼と聳える樹々が広大に繁茂した大森林。茂る青葉が蒼天からの日差しを遮り、夕暮れ時の薄暗さを保つ何処とも知れぬ地上。その樹海の端、森と平原の境目に位置する場所でザクッ、ザクッと草木を掻き分け、木々の間から姿を現したのは人型の岩塊……のような鎧姿をした〝彼〟だった。

『おお……やっと出られたか……』

視界一面に広がる平原を前に、くぐもった声を震わす。広大な森をさ迷い続けてはや数週間、ようやく森以外の光景を見ることを望められたのだ。

『〝あの者〟と出逢わなければ、我は未だ森をさ迷っていただろう……』

ちょうど半日前の今頃―〝目覚めて〟以来、初めて遭遇した自分以外の人間を思い出す。

出口を求めるも右も左も分からず探索してた時のこと、樹齢何百年も経つだろう太い大樹の根元に、ランプの灯りに照らされて浮かび上がる一つの人影を発見した。彼が近づくとその人物も彼の存在に気づき、口を開く。

「ほう……まさか、私以外にもこんな辺鄙な森をさ迷う物好きがいるとはな……クックックッ」

男性だった。

腕組みして佇むその背丈は巨体の彼にも届きうるほど背高く、見慣れぬ装束はその手の知識がない彼にも分かる極めて高い縫製技術による逸品なのが見て取れ、胸元に一輪の紅い薔薇を挿していた。

男は黒のロングハットの下にある満面の異様な微笑みを向け、不気味に笑う。

『貴公は?』

「ん？　私はただの旅人さ。貴様はさしずめ旅の戦士といったところか。旅するには随分鈍重な格好だが……まぁ、どうでも良いか。オラリオに向かう途中か？」
『オラリオ……？』
「ククッ、おいおい無知にも程があるぞ。今どき名前すら知らない奴は初めて見た。……よほどの世間知らずか、稀人か……」
『生憎、我には以前の記憶がさほど無いのだ。可能ならば教えてくれぬか？』
『訳ありか？　まぁ構わんさ。我々がこの暗い森の中で会ったのも何かの縁かもしれぬからな。クックッ……』
　怪しげな様相はともかく、男は快く話してくれた。その内容は全てが彼にとって未知であり、元より何故か大半の記憶を失っているとは言え、ダンジョン、ギルド、冒険者など一つだけ除き、後は全くピンとこない言葉の羅列に困惑の呻きを岩兜から洩らしてしまう。
「どうせ、貴様は戦うことしか能が無いんだろう。ならば、向かってみたらどうだ？　私には好き好んで穴底に潜る連中の気がしれぬが、かの地はまさしく世界の中心。相手がモンスターか人間のどっちだろうが、全ては実力がモノを言う素晴らしき都市だ……クックックッ……精々、頑張ってみるが良いさ」
『貴公は行かぬのか？』

「ああ、以前に赴いたことがある。観光する分には悪く無い場所だったさ」
この森を抜けた北の方角に迷宮都市はあると、男は彼に道を示した。男は彼とは反対の方角に向かうと聞き、彼は感謝を述べて男に礼を言い、教えられた道を歩き始めた。
「Ｓｏ　ｌｏｎｇ」
去り行く戦士の背に、見送る男はいつかと同じ別れの台詞を手向けた。

〜〜〜

『世界の中心……か。成る程、そう謳われるのも納得だ』
喧騒と活気に溢れ、大通りを埋め尽くすヒューマンを始めとした多種族の群衆が集う、圧巻の光景を眺めて呟く。歩みを止めてしまいそうになる程に圧倒される彼ではあるが、全身巌の巨躯をした重戦士の歩みに周囲の者達もまた、圧倒されていることに彼は気付かない。
森を無事抜けた後、北を目指して1ヶ月近く歩き続けると男が言った通り、巨大な外壁に囲まれた都市―オラリオに辿り着くことができた。都市に入る当初は多少ごたついたが最終的にすんなりと入れ、教えてもらったギルドという都市の管理機関で一通りの情報を入手後、彼は都市の中を散策した。

今のところ順調に事が運んでいるのだったが……

『ファミリア……この地で戦いを生業とするならば所属を勧められたが、さて、どうすべきか……』

正確には迷宮（ダンジョン）を探索する冒険者なのだが、どのみち自らの実力を生かしたくば録に知らぬ神々に従属し、恩恵を授からなければならぬことに変わりはない。彼の戦士然とした外見からギルド職員に冒険者業を紹介されたが、それにはまず第一にファミリア探しから始めなくてはならない。

しかし、彼はどうにも乗り気になれずにいた。

『〝神〟と聞いて如何な存在かと思ったが、どうにも人間臭い輩が多くなかろうか？』

散策中、彼は一部群衆に混じって異質な気配を持つ人間達に気付き、彼らが聞くところの〝神〟と名乗る超越存在（デウスデア）なのは直ぐに判明した。

ただ眷族らしき緑衣の女性に酒を強請る赤髪の女神

胡散臭い笑みをした羽根付き帽を被った旅装の男神

柔和だが、どこか腹黒さを感じさせる気品ある男神

俺がガネーシャだ！　と半裸で声高に宣言する象マスクの奇神（ヘンジン）

他、様々な神達を見掛けたが、大体が神と言うにはあまりに威厳とは程遠く、下界に住む人間達よりも人間臭さを感じせざる得ないのが占めていた。

下界生活を満喫している話は既に聞き及んでいるが、中には見てもいられぬ堕落を見せる神もおり、そんな彼らを見る度に何故か彼の中で沸々とした謎の怒りが込み上がり、肩に担ぐ大竜牙をヘラヘラとした美顔に向けて振り下ろしたくなる衝動を堪える羽目に陥った。

そのような訳で某少年が羨む程に道中、その威風から勧誘の声が何度か掛かるもどうにも胡散臭く、信用しきれないこともあり、彼は悉くこれを拒否した。

己が何者なのか自分自身すら知らぬが、例え一時期であろうと、我欲に忠実な彼らに仕え、その恩恵を賜ることに彼は激しい拒否感を抱かずにはいられなかったのだ。

『果たして、このままこの地にいるべきであるか……』

「どうしたのだ。そこの武人よ、何か困り事か?」

歩みを止め、広場の隅で佇んでいた時だった。

今後の身の振り方を考えていた彼に、優しく、穏やかな声が投げ掛けられた。

振り返った先には一人の男性。深い藍色の髪に美麗な顔立ち、くたびれた灰色のローブを着込んだ優男だ。

『ん? 貴公は—神か。我に何用か?』

「なに、ポーションを売り歩いていたらお主を見掛けたのだ。どうにも困り果てているようだったからな。つい、声を掛けてしまった」

『如何にも。しかし貴公が気にする必要は無かろう。ましてや我らは互いに無関係であるぞ』
「確かにそなたの言う通りだ。しかし見知らぬ者(子ども)でも困っているならば、手を差し伸べるのが私の性分だからな。暇を持て余している私で良ければ相談に乗ろう」
『……貴公は、他の神共とは違うようだな』
　彼がこれまで都市で見てきた、俗世にまみれたどの神とも異なる雰囲気に絆され、彼はこれまでの経緯を男神に語った。
「ふむ。どうした訳か以前の記憶がなく、行く当てがないからオラリオに訪れた。そしてファミリアを探していると。成る程、記憶が無いとは不幸な……。何とかしてあげたいが、残念ながら私は記憶を司る神ではないからな。失った記憶を戻す術は持たぬ。すまないがお主の力にはなれそうにない」
『これは我自身の問題である。貴公が案ずる必要は無い』
「そうか……お主は見た目に違わず強き心を持つのだな。お主ならばファミリアに招き入れたい者は引き手数多だと思うが？」
『幾度か招かれたが、その多くは信用に値出来ぬ者、或いは我とは気質が合いそうにない輩であった。娯楽に飢えた神というのはああも堕落するものなのか？』
　同じ神に対し、失礼極まりない発言をする彼に男神は咎める真似はせず、苦笑いをす

るだけであった。
「それは申し訳ない。何分、下界に降りたことで羽を伸ばす者が多いのもあるが、不変の神と子どもでモノの捉え方にズレが生じてしまうのだ。私も良く、自分の眷属(子ども)に叱られしまっているくらいだ。同胞達に代わり、私が謝罪しよう」
『貴公……』
自らに非が無いにも関わらず頭を下げ、詫びる男神に彼は初めて『神』に好感を覚えた。
『貴公、もし良ければ我を、貴公に仕えさせてくれぬだろうか?』
「私のファミリアにか? 確かに私も派閥を形成しておるが、団員一人しかおらぬ底辺も底辺であるぞ。そなたならばロキ・ファミリアのような大派閥の方が良いのでは?」
『構わぬ。我は貴公の神格に惹かれたのだ』
男神は、彼の言葉に込められた硬い意志を感じ取る。
二人の間に沈黙が流れること数瞬、男神は微笑みを彼に向ける。
「そうか、ならば喜んでそなたを迎え入れよう。貧乏ファミリアのしがない神であるが、よろしく頼む」
『自身の素性すら知らぬ身だが、我が精力をもって、貴公に尽くすことを誓おう』

――この日、医療系貧乏ファミリアに、一人の戦士が所属した。

「しかし、名前すら判らぬのも不便だな。まるで思い出せぬのか？　何か手掛かりになりそうなモノとか……」

男神に問われ、彼は深く記憶を探るも頭の中は分厚い白霧で覆われたようにぼやけ、まるで思い出せない。

黙り込む彼に男神は心配の眼差しを送る。

（何か、我を示すモノは……）

彼は自分の身体を見下ろす。

目に映るのは森を出てからこの都市に至るまで、ずっと体の一部のように着ていた鎧、所持していた大槌と大盾――それと嵌めていた一つの〝指輪〟……。

『ッ！』

不意に、太陽のように光輝く槍が白霧に投げ込まれた錯覚を覚えた。光輝の槍は霧の中で閃光炸裂、白霧を祓い除き彼に一つの言葉を閃かせた。

力強く頷くとこちらを見つめる男神に、岩のような戦士は名乗った。

『〝ハベル〟……それが我に残された記憶で最も深く、我が魂(ソウル)より刻まれし名だ』

〜〜〜

『あれから三年半……過ぎ去りし時のこと、風の如く……だったか？　実に的確な例えだ』

あの頃と全く変わらぬ喧騒と活気の中を歩き、しみじみと彼は呟く。右も左も、ろくに一般常識すら無かったあの頃と比べ、気付けば今や自分はすっかり都市の生活に順応し、それなりに名の通る冒険者になっていた。

（そういえば、この広場で我らは遭ったのか……）

ちょうど男神と出会った広場を歩いていたハベルは立ち止まり、感慨深く当時に思いを馳せる。すると、聞き覚えのあるやり取りの声が耳に入ってきた。

「あの、本当に良いんでしょうか？　貰ってしまって……」

「私が良いと言っているのだ。そなたの美しい肌に傷がつく姿は見たくない」

「か、神様……（ポッ）」

視線を向けた先には甘い詞を女性に囁き、ポーションを渡す男性。傍目には口説いているようにしか見えず事実女性は頬を赤らめて熱を秘めた眼差しで男性を見つめるが、

呆れたことに男性は全て素で行っているのだった。

『……また、ポーションを無料(タダ)で配りおって、団長殿に見せられんな』

呆れると共に所属するファミリアの団長である犬人(シアンスロープ)の女性の嫉妬姿が克明に浮かび上がる。毎度の如く女性に甘い男神に対する愚痴に付き合わされていたハベルだった。

『主、その辺で止めにすることをお薦めする』

「お世辞？　いや私は嘘が苦手だからな、全て本心からしか言わぬよ。―ん？　おお、ハベルでないか。よくぞ帰ってきた！」

流れるように口説き文句擬きを語っていた男神は彼の存在に気づくと、喜びの言葉を口にしハベルを迎え入れる。ハベルは自らの主に帰還を告げた。

『我が主、ミアハ殿。ただいま帰還した』

岩竜が如く

いつの時代、いかなる世界でも、過酷な地を旅する戦士達にとって己の傷を癒す術を持つことは必要不可欠な要素である。

不死たる勇者達でも秘宝たるエスト瓶無くして死地を潜り抜けることは叶わず、最高位の冒険者達でも携帯せずに迷宮へ潜る愚行はしない。

たった一度の使用に限れども、回復の手段を持つことは心に余裕を持たせ、瀕死に陥りようともそれが起死回生につながる唯一の生命線と成りうるのだ。

不死者（かれら）とは異なり、本来定命の者は一つにしか命を掛けられないのが常理。自身に使うのであれ、仲間の為であれど凶悪な怪物（モンスター）達が跋扈する迷宮は補給がままならず、使い果たした先で嘆く暇を、『ダンジョン』は与えない。

―故に、迷宮都市（オラリオ）の冒険者にとって回復薬（ポーション）は探索における必需品であり、それは馬鹿げた耐久性（カタさ）を誇る岩のような冒険者でも例外ではない。武器と同じく厚い需要があるポーションは下位から高位と幅広く生産されている人気商品なのだ。

……但し、

冒険者が必ず購入する代物だからといって、それを販売する専門店が必ずしも客入り

に困らない―ことは無い。

……

西の大通りから外れた路地裏に位置する寂れた店舗―【青の薬舗】。

五体満足の人体が描かれた看板（シンボル）が示すファミリアはかつては都市内の大通りに店を構え、それなりに栄えていたが月日は流れ、今やその栄光は見る影なく極僅かな者が利用している状態であった。

赤焼けた空の下で屋根にいる閑古鳥が鳴く中、光源が乏しい店内で犬人（シアンスロープ）の女性―ナァーザは一人店番をしていた。眠たげ気な目をしながら時折ゴソゴソと物品を整理するだけの平穏（たいくつ）な時間を過ごしていると、カランと鈴が鳴り店のドアが開いた。

「いらっしゃ―あっ、ミアハ様。随分早い帰宅……あれ、ハベルも一緒？」

「ただいま、ナァーザ。ああ、広場でハベルと会ってな。早めに切り上げて二人で帰ってきた」

『久方ぶりである。ナァーザ殿』

入店してきたのはファミリアの主神であるミアハと、大鎚を肩から下ろして低めに入るファミリア唯一の稼ぎ頭の団員―ハベルであった。

「お帰り、ハベル。見た感じいつも通りそうね。探索はどうだった？」
『フム、奴らに群れごと迫られたことは幾度かあったが、肩慣らしに丁度良い程度だ。それと、これが此度の探索の稼ぎだ。受け取って欲しい』
ドサッとハベルは卓上（カウンター）に金貨の入った一袋を置く。中身にたっぷりとした量が詰められているのがわかる重みのある音をナァーザは犬耳で聴くと、うっすらとした微笑みをハベルに向けて感謝を述べた。
「ホントに、いつもありがとうね……ハベル。これで、暫くは生活に困らない」
後ろでしっぽをパタパタと左右に揺らしている様子からも、彼女が見た目以上に喜びを感じていることを表している。
本来ミアハファミリアは生産系、主にポーション類を始めとした製薬関連のファミリアであるが、悲しくも本業である商品の一日の売り上げはあったとしても『名も無き戦士の大きなソウル』がやっとであった。
只でさえ薬の製造には金と手間が掛かるというのに、肝心の客入りは立地の悪さで店の存在自体がマイナーな状態下にあり期待出来ず、外で商品を販売してみるも主神の善意で無償配布されて消えるのが殆どであり、ハベルの稼ぎが無かったらファミリアの家計は骨の車と化していた。
もしハベルがいなかったら今頃、純朴な少年を騙してでも採算をとっていただろうと

ナァーザはあり得た未来を想像する。
『金銭以外に、薬の素材が足りなければ我が迷宮より取って参る。いつでも申してくれ』
「すまないな、ハベル。お主に負担をかけさせてしまって」
「……自覚があるのなら、今後は商品を真面目に売るようにして下さい、ミアハ様。誰が作っているとお思いで？」
とことんファミリアに忠を尽くすハベルにミアハは感謝と申し訳なさが入り交じった思いを口にするも、自分自身が経営難の原因の一端を担っていることに自覚が薄いことをナァーザに忠告されてしまった。
「う、うむ。わかった。―おお、そうだハベル！　夕食にする前にステイタスの更新を先に済ますか？　一ヶ月間ダンジョンに籠っていたのだ。お主も気になるであろう！」
暗い、生暖かなジト目を向けてくる眷属の視線から逃れようと、ミアハは慌てた様子で無理やり話題の矛先を変える。幸いなことにハベルにしても己がどれ程成長したか興味があったことで了承してくれた。
そそくさと部屋の奥に入る二人をナァーザは見送ると、ボソッと呟く。
「ウチのファミリア、そろそろ探索系に改めるべきなのかな……」

……

Ｌｖ２
力：Ａ８５３　耐久：Ａ８７６　器用：Ｆ３１１
敏捷：Ｉ４４　魔力：Ｉ０　対異常：Ｉ
《スキル》
【怪重乱武（ヘヴィーストロング）】
・一定以上の過重時における力と耐久の補正
・能力補正は重量に比例
・装着装備の耐性強化
【無尽活精（フルバイタリティ）】
・疲労軽減及び持久力強化
・活動時間の継続力強化

「相も変わらず、見事なまでの偏りぶりであるな」
ハベルの更新した、最新のステイタス表を一瞥したミアハは若干の呆れを抱いて呟く。アビリティの成長具合は個人の才能による違いこそあれど、いつしか限界域に到達すると幾戦を経ても僅かしか伸びないのだが、駆け出しの時からハベルのステイタスは

力と耐久が良く伸びる傾向にあった。
　Ｌｖ２にランクアップして以降もその成長ぶりに変わりなく依然として衰えないのは、常日頃から装着している専用の重装鎧一式に加え、更に重量級の大型武具を携えていることが成長に一役買っているのだろうとミアハは推測した。
　尤もその反面、器用と敏捷……特に敏捷は彼自身の戦闘事情もあって著しく劣っている。その為にハベルが迷宮においてモンスターから『逃走』することはほぼ意味を成さず、同業者から群れを怪物進呈（パス・パレード）されようとも全てを迎え討たなければ為らなかったこともしばしばあったが。
「既にランクアップの条件も満たしている。もしかすると年内にはランクアップするのもあり得るな」
『されど、その為には偉業―己の全ての実力を振り絞らなければなるまい。最低限、我が大竜牙の一撃に耐えうるモンスターでなければ話にならぬ』
　医神の恩恵を授かる以前からハベルはＬｖ１の冒険者を凌ぐ怪力と強靭な肉体の持ち主であった。それらが恩恵の能力補正で向上したに留まらず、前述の『怪重乱武（スキル）』の効果で更なる強化が施されたハベルは例えるならば『岩の竜』。
　並みいる冒険者とモンスター達の攻撃を弾く程の堅牢な岩の装甲と、階層主（ゴライアス）の硬い皮膚を内部の骨ごと打ち砕く大竜牙を振るう様は、さながら単体でも古代より猛威を振る

い、現代に至るまで最強の怪物種と謳われる竜（ドラゴン）を彷彿させると云う。

前回は２４階層に棲まう『木竜（グリーンドラゴン）』の討伐に成功してランクアップを果たしたが、今回も同様なことをするならより強い相手を求めて下層に赴く必要がある。偉業を果たすには必ずしも強大な敵を制する必要がある訳ではないが、自らの殻を破るにはこれ以上にない単純な内容だ。

「精進するのは良いことだが、努々油断はせぬようになハベル。お主が無事に帰ってくるだけでも、私とナァーザは喜ばしく思っているのだ」

五体満足で生還を果たせられることの大切さをミアハは説く。

以前、ハベルは恩恵により主神は眷属の安否がいつでも分かるのでは？　と聞くと、ミアハはこう返した。

「確かに神は自分の眷属ならば、どれだけ離れていようと繋がりを感じ取れる。しかし、神々（私たち）に分かるのは生死の判別のみだ。その者が無事か、危機に瀕しているか、その状態を知るには至らないのだ」

ハベルが自身のＬｖ以上の実力をもつ強靭な戦士なのはわかっている。中層でも彼に掠り傷を負わせられるモンスターは皆無と聞いている。しかし何が起きるか神でも予想がつかない迷宮を、単独（ソロ）で長期的な探索に赴く彼に不安を抱かずにはいられないのがミアハの本音だ。

かつて心身に深刻な傷を負い、冒険者を引退した眷属がいるからこそ五体満足で帰還出来る有りがたみを男神は知っている。

「お主が望むなら、ロキのようなより探索に力を入れているファミリアに改宗（コンバート）させても私は構わないと思っている。そこでならばお主の実力は大いに生かせられるであろうからな」

経歴不明、何処から流れてきたのか定かでなく、それでいて古代の英雄めいた強さを秘めている岩のような戦士は、この人と神で溢れるオラリオでもその特異性からかなりの注目を浴びている。今でもハベルの下にロキファミリアを始めとした大手探索系から誘いがあるくらいだ。

ミアハとしてはハベルの今後を案じての発言であったが、本人は〝否〟と応えた。

『愚問だ。誓約を交わした日より、我は貴公に仕えると決めた。報酬目当てに易々と主を違えるような気はない。―安心せよ主、我とて力の程は弁えている。亡者のように本能に身を任せ、無思慮に未知の領域に踏み入れた挙げ句無駄に命（ソウル）を散らかす気はない』

かつてとは異なり、不死の呪いから解放された今のハベルは定命の『人間』。

一度迎えた死に二度目の生は無い、されどそれが常世の理。

『我はハベル、ミアハ・ファミリアの戦士なり。たとえ我が身が倒れ伏しようとも、此所

より生み出された『ポーション』が我に生きる力を与えよう』

兎追いしかの岩

光源の乏しい洞窟を複数の小柄な白い影が駆ける。

彼らが疾駆する先で待ち構えるは自分達よりも遥かな巨躯で屹立する〝岩鎧の戦士〟。紅い眼に忌まわしき侵入者への殺意を宿し、各々の天然武器（ネイチャーウェポン）を手に躊躇なく接敵する小さな襲撃者―アルミラージの群れを前に対峙する戦士―ハベルは自前の巨大な大槌を地に突き立て防御（我慢）の構えを取る。

数瞬後―無骨な石斧の連撃（ラッシュ）が絶え間なく襲うも、ハベルはじっと耐えた。

個体での力は劣っていようと高い俊敏性と武器の扱いに長け、また集団での連携を主とするアルミラージらは上級冒険者であろうと油断出来ぬ脅威を秘めたモンスターである。彼らはたとえ倒すには至らずとも僅かでも岩鎧を削り砕かんと怒涛に石斧を叩き込む。

しかし思惑に反しその岩肌には一片の削痕すら付けられず、強靭な堅牢性を発揮させた岩鎧は無駄だと言わんばかりに彼らの攻撃を悉く弾くほか、逆に石斧が砕け散ることとなった。予想以上に堅すぎる手応えにアルミラージ側の流れに淀みが生じたのを察したハベルは即座に身体を動かし反撃へと打って出る。

『―ヌウゥンッ！』

地面に突き立てた大槌―大竜牙を両手に携え周囲に集る小兎達に対し、薙ぎ払う。風圧を生みだす勢いで放たれた大竜牙が哀れな獲物を纏めて弾き飛ばす。

自分達の微々たる攻撃を優に凌ぐ圧倒的威力に全身の骨と内臓が潰され、血反吐を吐く暇すら与えられずに壁に激突された雑兎達。ドサッと地に沈んだ時には既にもう、生命活動を終えた無惨な死体へと早変わりしていた。

全滅。

たった一撃、されど強大な力を誇った古竜の大牙を削って出来たとされる大竜牙の猛威は一角兎達を一蹴するには充分すぎるものであった。

『――オオオオオオオッ！』

『ムッ！』

息つく間もなく、新たなモンスターの咆哮と土砂を削る不穏な轟音が洞窟内に木霊する。ハベルが顔を上げると同時に通路の奥より闖入者が転がり込んだ。

土砂を撒き散らしながら凄まじい勢いで突き進むのは巨大な岩石を彷彿させる球体―ハード・アーマード。鉄壁と謳われる頑丈な甲羅を丸めることで高速回転で轢き潰さんと猛進する鎧鼠に、ハベルは大竜牙を片手持ちにすると背から鎧と同様に分厚い岩盤

めいた大盾をドスンッと力強く地面に下ろし、構えた。突進を真っ向から受け止めることを選択したのだ。

岩の大盾にモンスターが真っ正面から激突。

衝突して尚、勢いを緩めぬ鎧鼠の高速回転は止まることを知らず大盾と甲羅の隙間から激しい擦過音が発生する。

強い衝撃が大盾より伝わってくる筈もハベル本人はそれらしい様子をおくびにも出さず、高いスタミナでもって突進を受け止め続ける。完璧な防御が難しい鎧鼠の猛攻に対し僅かにも押されず、退かない。不屈にして不動の様を此処に体現してみせた。

負けじと対抗する鎧鼠とそれを真っ向から受け止めるハベル。両者の拮抗した攻防は数秒に満たず、唐突に終わった。

―バァン！

突進に耐え続けたハベルが大盾を勢い良く突き当てる。

それまで全く微動だにしなかった岩壁が突如迫り出して鎧鼠を襲い、硬い衝撃が炸裂。強引に繰り出されたシールドバッシュが高速回転を中断させることに成功した。

怯み、思わず球体を解いてしまったハード・アーマード。その無防備にさらけ出された頭上にハベルは背後で溜めた大竜牙を振りかぶり――次の瞬間には勢い良く下す。ブォンと風切り音が唸り、重厚な鉄塊に等しい大槌が鎧鼠の頭部を一切の抵抗無く潰し

た。
　再び大槌を上げたその痕に残っていたのは卵みたくグショグショに砕かれた頭部であった残骸と、内部より飛び散ったであろう鮮血の溜まりが地面の一部を色濃く染め上げていた。

……

「あの、すみません！」
　暫く中層をさ迷った後、適当に切り上げたハベルが地上に戻ろうと上層を渡っていた時であった。通路を歩く彼を何者かが呼び掛ける。誰ぞと振り返ればそこには映えた白髪が特徴的な、見覚えある顔立ちをした少年が立っていた。
『ん？　……貴公は、昨日の血に染まった者か』
「はい、そうです！　あの時は僕が勝手にぶつかった挙げ句、急に逃げてしまって、も、申し訳ありませんでした！」
　少年はビュンッと霞む勢いで頭を下げ、ハベルに謝罪した。
　昨日の失態を謝罪したいと思っていた彼は探索中、上層を歩いていたハベルを偶然見掛けて咄嗟に声を掛けたとのことだ。自分よりもずっと屈強な冒険者を前に緊張で声

が震えつつも精一杯の謝意を込めて謝罪する少年に、ハベルは気にしていないと告げた。
「ありがとうございます。あの、挨拶が遅れました。僕はベル・クラネルと言います。えーと、ハベルさんって言うんですよね。今地上に戻るところなんですか？」
『ウム。此度は気晴らしに過ぎぬからな。して貴公、お主は炉の女神が眷属であったな？』
「ヘスティア様ですか？　はい、僕はヘスティア・ファミリアの冒険者です。といっても僕しか団員が居ませんけど……。それがどうかしましたか？」
『なに、我が仕えし主神がミアハ殿といってな。以前より貴公の主神と親交の縁があるのだ。知っておるか？』
「はい！　ミアハ様のポーションにはいつもお世話になっています」
　ハベルがミアハ・ファミリア所属だと知り、ベルは嬉し気に顔を綻ばせる。聞けば、少年が【青の薬舗】の数少ない常連客であったり、ミアハより無料でポーションを貰ったことが数度あったなどハベルが長期探索に赴いていた間、短いながらも着々と自派閥との繋がりが構築されているのが判明した。
「あっ！　ごめんなさい、話が長くなってしまって。これ以上ハベルさんを引き止める訳にはいきませんね。昨日の件は本当に申し訳ありませんでした。何かお詫びが出来

たら良いんですけど……」

『別に我は気に留めておらぬ。故に貴公が殊更に気に病む必要は無い、その誠意のみで充分だ』

以後気をつけるよう、と諭すように告げるハベルにベルも納得し頷いた。

話はこれで終わりかとハベルが思いきや、不意に思い出したようにベルは一つの提案を彼に申し出た。

「あの……突然ですみませんが、もし今夜予定が空いてたらお店で一緒に食事しませんか？　実は朝、お店の人に誘われたんです。ただ、僕の稼ぎでは奢ることは出来ませんけど、ハベルさんが宜しければ是非……」

恐る恐ると語る。オラリオでの生活や冒険者の経験にしても浅く、まだまだ知らないことだらけな自分よりもずっと先輩であるハベルともう少しだけ話をしてみたい。そんな本音を密かに抱きながらベルは早朝の出来事を持ち出し、駄目元で誘ってみる。

思考に耽るハベルを尻目に、戦闘でも無いのに緊張からか手汗が滲み自分の鼓動が増してゆき煩くなるのを感じながらベルが返答を待っていると、ガシャリと鎧が擦れる音が鳴った。

ハベルは岩兜の中より少年を覗き、一言だけ告げる。

『良かろう』

「―ッ！　ありがとうございます。場所は『豊穣の女主人』というお店ですので、そこでお待ちしています!!」

パァッと不安気な表情が笑顔へと一変、元気良く店の名を告げると少年は奥へと走り去る。その兎を彷彿させる後ろ姿を見届けると、ハベルも地上への歩みを再開するのだった。

～～～

世界でも有数の繁華と活気が広がるオラリオでは冒険者、労働者と言った者達が日々の疲れを労っては陽気に騒げられる大衆向けの酒場が都市中に数多く存在し、毎夜そこかしこで賑わいを為していた。

その数ある酒場の中でも酒や飯の旨さ、見目麗しい容姿をした給仕達の存在から都市中の神や冒険者達からの評判がとりわけ高いのが『豊穣の女主人』という大衆酒場であった。

「いらっしゃいませニャー！」

来店したハベルを店員の一声が迎える。

広々と洒落た店内を見渡してみるも客達の中に特徴的な白髪が見当たらないので、ど

うやらまだ少年が来ていないと判断したハベルは一先ず待ち合わせの旨を猫人（キャットピープル）の給仕に伝えると、そのまま案内されたカウンター席の隅へと移動して座る。

そして適当に注文した酒と肴が来た頃、待ち人たる白兎が入店してきた。

「すみません、お待たせして！　ちょっと此処を探すのに時間がかかっちゃいました」

『さほど待っておらん。貴公も座るが良い』

迷宮にいた時と同じくペコリと頭を下げる少年に、席に着くよう促す。畏まった様子で少年はハベルの隣、ちょうど壁とハベルに挟まれる形で座った。

『貴公のファミリアの団員はお主一人だけであろう。主神はどうした？』

「えーとっ……それが神様も誘ったんですけど、何かバイト仲間との打ち上げがあるって行っちゃいました」

突然言い出すと同時に飛び出して行ったと困惑気味にベルは語る。自分の分も頼もうとメニュー表を見て何やら顔を二転三転するが無事、一番安価なパスタを注文したところで二人は雑談を開始した。

「僕はこういう所に来るのは初めてなんですけど、ハベルさんは何度か来たことがあるんですか？」

『時々寄る程度であるな。普段は迷宮にある迷宮街（リヴェラ）を拠点にしておるから、地上より迷宮の酒場を利用するのが多いかもしれん』

「えっ、迷宮に街なんて在るんですか!?」

凶暴凶悪極まるモンスター達が無限に跋扈する迷宮に街の存在を聞き、分かりやすく仰天（オーバーリアクション）するベル。それをきっかけにハベル自身も意外に感じるほど話が弾み、ベルもまた目を輝やかせながらも真剣に耳を傾けた。

「ハベルさんってＬｖ１の時に階層主と戦って倒したと聞いたんですけど、それって本当何ですか?」

『巨人（ゴライアス）か?　交戦したのは事実ではあるが残念ながら途中で他の冒険者達が介入してきたが故、討伐には至っておらん』

当時の心情を思い出したのか無念そうにハベルは語る。

冒険者デビューとなった初探索時、想定した以上に攻略が捗り気づけば上層を過ぎ中層１７階層にまで到達した。そこで丁度ハベルの前に誕生したのが階層主ゴライアスであった。

これまでの道中で遭遇してきたモンスター達よりも明らかに抜き出た強敵。しかし狼狽するよりも先に戦意が奮い立ち、撤退ではなく交戦を選んだ。

繰り広げられる激闘。

ゴライアスの拳はその巨体に相応しく強烈な威力を秘め、ハベルの鎧を破壊するには至らずともその上から容赦なく衝撃を与え続けた。だがハベルも全力で挑み、着実にゴ

ライアスに損傷を蓄積させる。

本来ならばＬｖ１の冒険者如きがたとえ束になって襲い掛かろうと容易く蹴散らされる筈が、ハベル単独で立ち向かえるのは単に大森林より目覚めた時から備わっていた装備とその特性を生かしたスキルがあったが故だ。

致死の一撃も大盾を用いることで防御し、巨人の足元に近付いては大竜牙をぶつけ集中的に狙う。

派手な攻撃も無く、硬い皮膚を裂く刃も持たず。

自らに在るのは岩の戦士たる装備のみ。

されどそれで十分。鈍足であろうと元より敏捷など不要。

ただひたすらに攻撃を耐えては避け、隙が生じれば一撃を叩き込む。それらの愚直な繰り返し。だがそれが脳筋の戦いだった。

長期戦になるかと思われた戦いはしかしその後、戦闘開始から暫く経つと轟音に気づいた迷宮街の冒険者達が戦いに介入し出し、流石のゴライアスもＬｖ２以上の冒険者達の集団を前に討伐されたのだった。

ハベルとしては存分に力を振るえた戦いに水を差されて当然不満が生じぬ訳では無いが、結果的にこの出来事が迷宮街の冒険者達に一目置かれる事となった。その威圧的外見の効果も相まってハベルを無下に扱う者はほぼおらず、Ｌｖ２となった今ではすっ

かり迷宮街（リヴェラ）の常連として認識された。
『ゴライアスの他に記憶に残るモンスターとなると木竜（グリーンドラゴン）だな。……あれは実に強く、魂を揺さぶる戦いであった。果てなく戦（や）り甲斐があったというものだ』
　しみじみと当時を振り返るハベルに、ベルが質問する。
「凄いんですね……僕なんてゴブリン一匹倒しただけで舞い上がっちゃいましたから。ミノタウロスに遭った時だって……いえ、何でもありません。
　あの気になっていたんですが、ハベルさんって冒険者になる前は何やってたんですか？　話を聞いていると冒険者になる前から、何て言うか……戦い慣れているように思うんですけど」
『―』
　無言。それまで機嫌良さげな雰囲気に見えた岩のような戦士は手甲を前に翳し、沈黙する。顔全体が岩兜に覆われてその表情は伺えないが、まるで手甲（ガントレット）に隠された自身の指を見つめているようにベルは思えた。
「あの、言いたくなければ『解らぬ』―へっ？」
『己が何者か……名も出身も、それすら我自身が解らぬのだ』
　忘れた、というよりまるで白くぶ厚い霧に閉ざされた感じだとハベルは静かに語る。
『時折僅かに脳裏に顕れるのは何処とも知れぬ地の戦―その残滓のみ。迷宮の怪物共と

は異なる異形の生き物や竜、或いは人間を相手に戦ってきた記憶だ。

……この『ハベル』という名も、浮かんだ言葉をおこがましくも名乗っているに過ぎぬ』

手に取っていた酒杯を置き、じっと中身を覗く。小さく揺れる波面に岩兜が淡く映った。

『この迷宮都市（オラリオ）に足を運んだのも他に行くあてが無かったが故だ。迷宮に手掛かりがないかと冒険者になってみたが、未だに思い出せん。

……すまん、この話は酒の席に合わぬな』

「い、いえ。大丈夫です」

周囲の陽気な賑わいとは裏腹に、しんみりとした空気が両者の間に流れる。これを不味いと思ったのか、話題を変えようと今度はハベルが少年に質問した。

『貴公は何故にこの都市に来たのだ。見たところ、名誉や金が目的には思えぬが？』

「僕ですか？　……えーと実は――「ご予約の団体様ニャー！」」

ベルが話し出した途端、不意に店員の掛け声が酒場に響くのと同時に、十数人規模の団体が入店してきた。

『ん？　ああ、ロキ・ファミリアか』

ハベルと同じく客達も彼らの正体に気付き、途端に店内はざわめきに包まれた。

ロキ・ファミリア。この都市に住まう者―いや世界中で知らぬ者は居ないと云われるオラリオ二大派閥の一角。店内は忽ち彼らの話題で持ちきりとなる。

『ちょうど昨日より、深層から帰還してきたと街で話題になっていたな。相も変わらず、相当な手練れ達だ――貴公、一体どうしたのだ？』

他の客達とは違って特に反応しないハベルは食事に戻ろうとする。だがやけに静かな隣を見れば、ベルの顔は火で炙られたかのように紅潮し常時よりも熱の籠った深紅（ルベライト）の瞳が一心不乱に集団を覗き見ていた。

ハベルが再度呼び掛けると、やっと我に返る。

『やけにあの者達を見ていたが、彼らがどうかしたのか？』

「はっ、はい……。実はハベルさんに出逢う前、僕はあの人達―というよりアイズ・ヴァレンシュタインさんにミノタウロスから助けて頂いたんです」

『ああ、上層のイレギュラーか……』

少年の指差す先には可憐で麗しく、それでいて神秘的な雰囲気を漂わす金髪の少女が仲間に囲まれて座っていた。

アイズ・ヴァレンシュタイン―『剣姫』の二つ名を持つＬｖ５の冒険者。彼女もまたこの都市で知らぬ者はいない超の付く有名人であり、その彼女に絶対絶命の状況から間

一髪救われたとハベルに教える。
ハベルの岩鎧に全身を隠し、赤い顔でこっそりとロキ・ファミリアの宴会―いや、剣姫を盗み見るベルとそれを呆れた様子で眺めるハベル。
一方で周囲の様子に意を介さず大量の食事にありつき、宴に耽けるロキ・ファミリアの面々。
平穏に進むかと思われた食事（ランチタイム）は、唐突に言葉を発した獣人の青年により破られた。
「アイズ！　お前のあの話を聞かせてやれよ！」
ドンッと酒杯を置くと周囲に聞かせるように大声で喋り立てる。
その内容は遠征での帰路の途中、遭遇（エンカウント）したミノタウロスの群れが大量に逃げ出してしまった話。
上層に逃走したミノタウロスを青年とアイズが追いかける中、最後の一匹をアイズが討伐した――その近くにいたひょろくさい冒険者、〝トマト野郎〟の話題。
自身の鎧の陰に身を潜めていたベルが身を震わしたのを、ハベルは気づいた。
『……貴公？』
怪訝に思ったハベルが声を掛けるも本人の耳にはまるで届かない。見れば少年の小

柄な身体は凍りついたかのように硬直し、ひきつった顔は青ざめていた。
その間にも青年は愉しげに件の冒険者が如何に醜態を晒し出していたかを語り、それに釣られたロキ・ファミリアのメンバー達や聞き耳を立てていた部外者の冒険者も失笑を堪えては洩らし出す。
ここに来て、漸くハベルは件の冒険者が隣にいるベル・クラネル自身であることを察した。だが、気づいた時には既に遅かった。
「雑魚じゃあ、アイズ・ヴァレンシュタインには釣り合わねぇ」
青年が言い放つのと同時に突如少年は立ち上がり、飛び出した。
『ッ貴公!・』
咄嗟に手を伸ばすハベル。しかし少年は瞬く間に店内を駆け抜けて外へと飛び出し、岩の手甲は虚を掴むに終わった。
刹那の出来事に客も店員も困惑でどよめ立つ店内。食い逃げかと周囲からの声が沸き立つ中、動揺を一瞬に終えたハベルは迅速に動く。
『店主、酒代だ。今飛び出した連れの分も合わせて足りるであろう』
持ち合わせの、そこそこの重さがある金貨袋をカウンターに置き言い放つや否や、女将の返事は聞かず重い巨体を揺らして自身も酒場の外に出る。
途中、後ろから声が掛けられた気がするも無視して少年を追走。巨影が夜の都市へと

消えていった。

……

この時、ハベルは失念していた。

あの純粋純白な少年ベル・クラネルを追いかけんとするのは良い。短い間ながらも彼との交流は己に懐かしき過去の情景を想起させ、また彼の人柄の良さが十二分に伝わってきた。

あの酒場でベル・クラネルが何を想い立って飛び出したのか正確には測れずとも、このまま見過ごす真似はハベルの〝人〟としての性分が許さなかった。たとえ互いの主神同士に関わりが無かろうとも、関係の無い話であろう。

追いかけ、走ることに問題は無い。だが一つだけ、ハベルが考慮していなかったものがあった。

『ウーム……ベル・クラネル、一体何処に……』

絶望的なまでの敏捷（あし）の遅さ。

普段から、それこそ迷宮から地上共に身体の一部同然に装備している岩鎧一式（ハベルシリーズ）はその外見に相応しく高い防御力を誇るほか、着用者に〝超重量〟の重荷をもたらす。

大の大人であろうとも一歩歩くのがやっとの重さ、それがハベルの走りを阻害していた。

とはいえ恩恵、それもＬｖ２に昇華した力の補正は非常に大きく、岩鎧を身に付けていようとも全身重装備（フルプレート）の恩恵無し戦士と比較すれば、見た目にそぐわない素早い身動きを可能とさせ、ついでに外食に出る際に同じく超重量の大竜牙と大盾をホームに置いて来た為、Ｌｖ１の平均的な速さは出せる身軽な状態であった。

――が、恩恵による強化補正は他の冒険者、この場合はベル・クラネルも同様の事である。

駆け出しの為そこまで敏捷パラメータが高くはないのだが、出遅れてしまい距離を取られた他、人混みで見失ってしまったのが痛かった。

少年の行方が分からなくなったハベルは一旦立ち止まる。スタミナに任せて都市中を走り回るよりも一度周囲に見掛けていないか尋ねてみることにした。

早速付近を見回してみると、ちょうど通りを歩く人影を発見したので近づく。

『失礼！　突然済まぬが貴公、白髪の少年を見掛けなかったか？』
「ん？　何だい、人探しかい？」
ハベルが話し掛けたのは男性と思しき人物であった。
上質そうな青い上衣（サーコート）の上に肩や脛といった要所を守る金属防具。頭部には騎士が身に付けるような金属製の尖ったバイザー付きヘルメットを被り、腰には直剣を帯び背には標準的なサイズの盾を装備している。
第一印象としては騎士装備を旅など身動きのしやすさを優先に軽装化した流浪の騎士といったところか。
「君の探し人かどうかは知らないが、白い髪をした男の子ならこの通りを真っ直ぐ―バベルと云ったかな？　あの大きな塔を目指して走っていったよ」
『バベル？　……そうか、ダンジョンか！　済まない、貴公。恩に着るぞ』
情報を提供してくれた騎士に礼を述べると、岩鎧の戦士は地響きを伴い足早にバベルへと向かう。
その後ろ姿を騎士は見送ると、不意に悔やむような言葉を洩らした。
「しまった。どうせだったら、オラリオのオススメ安宿でも教えてもらえば良かったかな？　いや、あの人は忙しそうだったからどのみち無理だったか」
くいっと騎士が上空を仰ぐと、夜空はいつの間にか黒々とした雲に覆われていた。

「雲行きも悪くなっているな。晩飯よりも先に今夜の宿を探した方が良いかもしれん」
そう一人独つと流浪の騎士は歩みを再開し、夜の繁華街に向かうのだった。

岩が来たから帰ろうか

「グルゥウ……――ヴッ!?」

一匹のコボルトが迷宮をさ迷っていた。

ひくひくと鼻を鳴らし周囲に目をやって獲物を探す中、前方で一つの影を捉える。自分よりも遥かに巨体で分厚そうな岩鎧を纏った冒険者。コボルトが背後から忍びよっても気づいた様子を見せず、立ち尽くす彼は言葉を溢す。

『う～む……どうも五階層(ここ)では無さそうだな』

一通り五階層を走り回ったところで、ベル・クラネルはこの階層に居ないとハベルはそう判断する。〝ベルに向かった〟という通りすがりの騎士の言葉から少年がダンジョンに潜ったと考えたは良いもののダンジョンは広く、深い。

当初は少年が駆け出しであるため精々4～5階層をさ迷っているであろうと思っていたハベルだが、実際に4～5階層全体を一時も休む事なく、時折目の前を遮るモンスターを蹴散らしながら走り回っても、あの特徴的な白髪の姿は何処にも見掛けなかった。

「グルゥアア！　『ドゴン!!』　グヴァッ?!」

（更に下の階層か？　すれ違いならば良いが、居るとしたら……まずいぞ）

背後から飛び掛かってきたコボルトを振り返る事なく裏拳で撃沈させながらもハベルは思考を巡らす。六階層からは出現するモンスターの種類（レベル）が変化するというのもあるが、何よりも先ず少年は〝探索装備〟をしていない。ハベルが酒場で見た限り武装と言えるのはナイフ一本のみ、自分と異なり鎧を着用していなければ回復ポーションすら携帯していない状態だ。

低層ならば素手であったとしても生き残ることはそれほど難しくはない。たとえ少年が我を忘れてがむしゃらに狩っていたとしても、ゴブリン程度ならばハベルも心配しない。

しかし、ダンジョンは下層になるにつれて『難易度』が上がる。

『杞憂であらんことを……』

己の実力を顧みず、格上の相手を襲う愚者の末路は〝死〟。呆気なくその命を消費したコボルトの死体を見下ろし、少年が同じ目にならないことを想う。そう願いながらも少年が下層に居るであろうと、漠然とした予感を感じながら六階層へと向かうハベルであった。

「はぁっ……はぁっ……」

ハベルがベル・クラネルを発見をしたのは、ちょうど少年が六体のウォーシャドウを撃破し終えた頃のことであった。

夢見のようにふらふらと立ち尽くす姿はボロボロで複数の傷を負い、疲労困憊で今に倒れてもおかしくない様子であった。ハベルが見つけるまでの間どれほどの死闘を潜り抜けてきたか、地面に散らばる魔石が証明していた。

ズシッ、ズシッ、……

「！　……ハベルさん？」

重い足音に反応し、やや間を置いて少年側も気づく。岩鎧の戦士を見てもどこか心あらずといった様子に、ハベルはポーチから何かしら取り出すと黙って少年の頭に振り掛けた。

「ちょっ、ワッ！　な、何ですか?!」

『ファミリア特製のハイポーションだ。その程度の傷ならば瞬く間に癒えよう』

緊急時用に最低一本は常備している（滅多に使わない）ハイポーション。ミアハ・ファミリアが作成可能な最高品質のポーションの効果は即座に発揮し、少年の傷を癒した。

完治したのを確認して頷くと、少年に帰還を促した。

『では、地上に戻るぞ』

「でも、僕はまだ――！」

ダンジョンに残りたい―そう言いかけてハベルを見上げるも岩兜の中から発せられる、有無を言わさぬ圧が込められた視線に気づくと言い竦んだ。

『貴公の今の姿は到底、死地に挑む者とは呼べぬ。それ以上に潜りたくば、先ずは〝冒険者〟として相応しき姿であることだ』

「ッ！　……はい」

ハベルは少年の突発的な行為には触れず、ただ冒険者としての在り方を少年に諭す。重々しく告げられたことで、少年は今の自分がどれだけ彼に迷惑を掛けてしまったのか冷静になった思考で自覚する。そして逡巡したのち小さく俯くと、か細い返事をした。

……

「ハベルさん、その……色々とすみませんでした……」

『気にしておらん。その謝意は寧ろヘスティア殿の為に取っておけ。今頃、貴公の身をさぞ案じているであろう』

地上への道を辿る中、少年は本日二度目の謝罪をする。昼間の瑞々しい活力溢れた姿とはうって変わって、しょんぼり、とぼとぼと意気消沈して歩く姿は目を当てられない様だった。

今だに少年の奥底では酒場の一件が燻っているのであろうと流石のハベルも察するも、かといって上手い慰めの術など知らぬ。さてどうしたものかと岩兜の中で唸るハベルに、少年が口を開いた。

「ハベルさんって、目標の人っていたりしますか？」

『道標なる人物か？　ふむ……わからぬな。我の場合は過去の記憶が曖昧ゆえ、明言出来ぬ。今も同じだ』

「あ、そうでしたね。……それじゃ、もし憧れの人が遠くにいて、自分もその人の隣に立ちたいって思うことは間違っているんでしょうか？」

『……剣姫か？』

酒場で見た少年のアイズへの熱中ぶりからハベルが少年の想い人の二つ名を出すと的中、少年は顔を紅くしてコクンと頷く。

そして訥々と語り始める。Ｌｖ１とＬｖ５を隔てる壁は遥か高く、苦難の道のりであることを承知してもアイズ・ヴァレンシュタインへの感情（憧れ）は絶ちきれず、寧ろ急かすように強さを渇望させると、その胸の内をハベルに打ち明けた。

『あの狼人めの戯れ言を気にしているならば捨て置け。元より我らは底知れぬ迷宮に挑む〝冒険者〟であるぞ。戦地にて如何なる思いを抱きて駆けようが関係無い。

―だが忘れるな、貴公。我らは〝不死〟では無い。一度でも命尽きれば後は骸と散る

のみだ』

「……ハベルさん」

その堂々たる語る様は少年の目にはハベルが第一級冒険者、あるいは幼き時に絵本で覗いた偉大な英雄に見え、Ｌｖとは異なる格の違いに圧倒されるものがあった。

〜〜〜

「うぅ……。遅いなーベル君。一体どうしたんだろう？」

星々が瞬く夜空の下、廃墟同然の教会（ホーム）の前でヘスティアは一人寂しげに座り、時折吹く風に身を震わせながらも健気に眷属の帰宅を待っていた。だが真夜中を過ぎても少年は一向に戻らず、次第にヘスティアの大きな胸の内に不安が募るのだった。

（ハベル君も来るって言ってたから、大体のトラブルは何とかなると思うけど……にしても遅すぎる。まさか二人に何かあった？）

小柄で可愛く、愛らしい兎を彷彿させる少年とは正反対に大柄で頑強、常に岩山めいた重鎧をしたハベルの姿（というかそれ以外知らない）がヘスティアの脳裏に過る。

医神の眷属というには重々しく厳つい戦士の印象を見受けられるが、実際に話して見れば忠義に厚く、硬い信念を持つ真っ直ぐな性格をした人柄が感じられてヘスティアは

彼に好感を抱いていた。オラリオの地理に明るくないベルはともかく、ハベルならば都市に慣れており、その実力も高いと聞く。彼の性格的に少年を何処かに連れ回すというのも考えられない。

「やっぱり心配だ。一度ミアハのところにも行ってみよう！」

思い立ったが即決。立ち上がり直ぐさま友神の処に駆け出そうとしたヘスティアだが、ふと道の先で大小二つの影が現れ、こちらに向かってくるのに気づき足を止めた。

「あれは……ベル君とハベル君！」

乏しい足取りで近づいてくる二人にヘスティアは駆け寄り、愛しい眷属の消耗しきった姿に目を見開いて驚愕した。

「ただいま、神様……遅くなってすみません」

「どうしたんだい、その怪我は!?　誰かに襲われたのかい？」

「いえ……ダンジョンに潜っていました」

〝ダンジョン?!〟と驚声を上げたヘスティアは理由を問うが、少年は黙したまま俯いて語らない。代わりに隣で佇むハベルに理由を尋ねた。

「ハベル君、一体ベル君に何があったんだい!?　君たち、食事に行ったんだよね？」

『久方ぶりであるヘスティア殿。安心なされよ、ダンジョンで負った傷は完治されている。今は休息を与えて詳細はまた後日、本人に尋ねるが良かろう』

「そうだね……君の言う通り、今はベル君を休ませるのが先だ。ベル君の面倒を見てくれてありがとうハベル君。ミアハにもよろしく言っておいてくれ」

慌てふためくヘスティアだったが、ハベルの冷静沈着な応答を聞いて自身も落ち着きを取り戻し、感謝を述べた。

『承知、其れでは失礼いたす。――ベル・クラネル、貴公に〝炎の導き〟があらんことを』

去り際にハベルは少年へ言葉を送る。少年は意味が解らずハベルに聞き返した。

「何ですか、それ？」

『さて？　貴公らを見ていたら不意に浮かんだ言葉だ。我にも解らぬ』

当の本人にも何故その言葉が浮かんだのか不明で首を傾げる。すると横で聞いていたヘスティアがヒョイと顔を出して答えた。

「ボクが竈と炎を司っているからじゃないかい？　ハベル君、わかっているじゃないか～ベル君にはボクの存在が必要不可欠だってことを！」

〝気に入ったよ、その言葉〟と頬を緩ませ嬉し気に言うヘスティア。

竈の中で燃ゆる炎のように暖かく、篝火がもたらす安息を彷彿させるその朗らかな笑顔に、ハベルは女神の祝福を感じた。

――ガシャリ、ガシャリ、ガシャリ

『憧れ……かぁ』

廃教会を跡にした帰り道、鎧から垂れる鎖の擦過音を聴きながら歩む中、ハベルは少年の剣姫に対する憧憬の話を思い出す。初めて聴いた際、何故か胸の奥底がざわついたのだ。その理由は今でも不明だ。

『〝ハベル〟――あるいはこの名こそ、我にとっての憧憬なる御仁であろうか？』

指輪を填めた手を掲げ、問いを投げるも当然答えはない。

だが〝ハベル〟という御名こそ、『岩のような戦士』である己のルーツである、そんな確信に似た思いを抱きつつ、彼は【青の薬舗】へ帰宅した。

ある日森の中、岩と恐竜と…

　日中だというのに薄暗く人気の無い、都市の喧騒から忘れられたような裏通りに立つ寂れた【青の薬舗】。
『臨時休業』の文字が刻まれた木板が扉に掛かった店内では、主神と二人だけの団員が一つの部屋に集い、腰掛けていた。
「それじゃ……今からファミリア会議を始めます」
　普段見せる眠気な表情を消し、重々しい顔でナァーザは宣言する。団長である彼女の言葉にハベルも岩兜を揺らし、頷き返した。
「会議の内容は先に言ったように、今後のファミリアの経営について。特に深刻な客不足の問題について、解決法を話し合いたいと思う」
　今回の議題はズバリ、『どうやったら赤字続きの【青の薬舗】に大勢の客を呼び寄せられるか』
「わざわざうちのポーションを買いに店まで来てくれる常連客（物好き）は極々僅か。外回りでの販売もほとんどが無償（ただ）でばらまかれる始末。今まではダンジョンの収入があるお陰で、辛うじてやってこれた」

ギルドの登録上、ミアハ・ファミリアは製薬を得意とする商業系に分類されている。しかし日々の収入の大部分がポーションの販売ではなく、ハベルによる探索の稼ぎが本来の商売を遥かに上回り、ファミリアの運営を支え続けてきたのであった。

薬神（ミアハ）が監督していることだけあり、薬の品質が他所に劣ることはないとナァーザは品質に自信を持っている。しかし【青の薬舗】は大通りから離れているために店の存在自体がマイナーであり、知る者は少なかった。

「ミアハ様の無償配布云々はもう仕方ないから諦めるとして、やっぱり直接この店に客を呼び寄せない限り、この現状を脱せないと私は思う」

う、すまないナァーザ……と、申し訳なさげに体を縮ませる主神を尻目にハベルは意見を口にした。

『されどナァーザ殿、ポーションを必要とする冒険者は多くあれど、購入するのみならば他の店で済む話だ。よほどの低価格か、ポーションに〝特別性〟を持たせぬ限り彼らの足が赴くことはあるまい』

「確かに、ハベルの言うとおりだ。バベル前の冒険者通りは特にその手の、冒険者向けの店が多い。……ここの立地は少々、バベルから離れておるからな。皆は近場の店で済ましてしまう」

仮に存在を知っていたとしても、そもそもポーション類はその需要の高さ故に、販売

する店は最大手であるディアンケヒト・ファミリアを始めとして、都市中のあちらこちらに規模を問わず無数に存在する。その為に別の薬舗でも事足りてしまう。

わざわざ辺鄙な立地にある【青の薬舗】に通う常連客（物好き）と言ったら、神友同士の付き合いがある竈の女神や武神の眷属達ぐらいであった。

後輩と主神の至極全うな意見に、ナァーザも同意する。

「そう。ミアハ様とハベルの言う通り、うちの店は他所と比べて変わり映えする商品は無い。だから客足を増やすには、うちだけの……〝ミアハ・ファミリアだけにしかないポーション〟が要る……と私は思うの」

『我らの店のみに存在する、ポーション……？』

「うん、さっきハベルが言った〝特別なポーション〟が正にそれよ。従来のポーションとは違う、全く新しいポーションをうちの目玉にすれば、客足が一気に増えるはず」

「つまり新薬の開発ということであるな、ナァーザ。だが新薬の開発となると、都合良く出来上がらせることは難しい。何か開発の見込みがあるのかい？」

「はい、一応ですが。でも、今うちにある材料だけでは足りません。なので先ずは材料の調達から始めなくてはいけません」

『迷宮の素材であれば今すぐにでも取って参ろう。元より我は薬作りの才は不得手にして浅学の身。ならば我の力でもって、喜んで力を奮おうぞ』

間髪入れずに頼もしい、岩のような戦士の力強い宣言に、ナァーザは目元を緩ませる。腰から生えた尻尾が、ふわりと揺れた。

―余談だが、以前ハベルも興味本位でナァーザの指導のもと、ポーションを作成したことがある。慣れていない作業に苦心しつつも辛うじて最低品質のポーションの作成に成功したが、結局素材のそれぞれの効果や調合の配合などの知識、普段の豪快な戦闘とは真逆に繊細な作業が身に合わず、一度きりに終わった。

それ以降、薬の作成は高い技術を保持するミアハとナァーザに一任し、ハベル本人は迷宮探索を通して調合に必要な素材の採取を担当する方が効率的と判断されたのだった。

「ありがとう、ハベル。もちろんハベルの力にも頼りにさせてもらうけど、この新薬の完成はハベルだけじゃない。私やミアハ様、全員が力を合わせる必要がある。……だから皆で、頑張ろう」

団長の言葉に、主神と団員の双方が大きく頷く。

ミアハ・ファミリア―三人の一致団結が、ここに決まった。

「じゃあ……まず最初に、開発に必要な素材について説明するね。素材があるのは――」

～ファミリア会議を行った、その翌日～

『ナァーザ殿、此処が目的地である〝セオロの密林〟とやらか？』

眼前に広がるのは、鬱蒼と茂りに繁った大森林。その圧巻な光景を、岩のような戦士は重兜の中より覗き見る。オラリオから馬車で東に半日ほど進んだ地に存在する『セオロの密林』。その密林の入り口にミアハ・ファミリア一同は佇んでいた。

確認するハベルに、ナァーザは首肯する。

「うん、間違いない。この密林を進んだ先に〝奴らの巣〟があるはず」

「往復の時間も考えればあまり長居は出来ない。二人とも準備は良いな？」

ミアハが馬車から降りて二人に近づく。荷物を背負ったその格好は普段のローブ姿ではなく岩の重装を纏ったハベルとは真逆な、ナァーザと似たような身軽な軽装を着込んだ姿だった。

問題無し、と応える眷属達。それに主神は満足気に頷くと、一行は密林へと足を踏み入れた。

……

ハベルを先頭に隊列を組み、一行は森の奥を目指して進む。太い幹とハベルを軽く上

回るほどの樹高を持つ樹林の中を歩くこと暫くして、やがて一行は広々と開けた窪地へと抜け出た。

目的地に着いたナァーザは木陰に身を潜めながらハベルに指示を飛ばす。

「じゃあ、ハベルは打ち合わせ通りに〝これ〟持って奴らを全て引きつけてきて。何匹か集まってくると思うけど、大丈夫？」

『心配無用。かの迷宮より遥かに力が劣った輩が何匹集ろうと、奴らの牙が我が鎧と盾を打ち砕くことは叶わん。我の援護は気にせず、ナァーザ殿はミアハ殿の護衛を頼む』

厳重に密閉されたバックパックを預かると、ハベルはブォンと携えた大竜牙を肩に担ぎ重々しく頷く。そして二人から離れ、窪地へと近づいた。

ある程度近寄ると一気にバックパックの口を開放する。すると刺激ある異臭がたちまち辺り一面に立ち込めていく。それ以上ハベルは何もせず、後はただ岩山のように屹立し、待ち構えるのみ。しかしそれも僅かな間であった。

『―現れたか』

ズシンッズシンッと響く、自分ではない重い振動音に反応してハベルが背後を振り返ると、そこには紅色の恐竜が立っていた。

『ブラッドサウルス』―古代より迷宮から地上へと進出したモンスター達の末裔。ハベルよりも一回り上回るサイズに巨大な顎を持つ大型級モンスターの後ろで、更に森から

二体のブラッドサウルスが血肉の臭いに誘われて姿を現す。

「オオオオオオオオォォォッ!!」

真っ先に牙を剥いたのは一番最初に出現した方だった。森全体に轟くかのような咆哮を上げたブラッドサウルスは巨大な顎を開き、目の前に屹立する岩のような戦士を噛み砕かんと突進する。

恐竜の突撃に対して、咆哮を直に浴びてもハベルは何ら動揺も焦りも示さない。その場から一方も動かず、ドスンッと背負っていた大盾を正面に置き構えた。

数瞬後、ブラッドサウルスは大盾に激しく食らいつく。そのまま自慢の顎で大盾を砕き、その後ろにいる戦士ごと食らいつかんと顎に力を込めるも、だが大盾は砕けない。

岩盤のような大盾はブラッドサウルスの予想を超えて遥かに硬く頑丈で、自身の突進にも巨岩が如く、微くとも揺るがない。

『フゥンッ!!』

纏わりつく恐竜に、おもむろにハベルは勢い良く大盾を押し出す。突然迫り出した岩壁にブラッドサウルスは為す術なく大口諸共に叩きつけられる。その強烈な衝撃力に仰け反るどころか、ブラッドサウルスの巨体が嘘のようにぶっ飛ばされた。

〝思ったよりも軽いものだな〟 ―と手応えの軽さをハベルが吐露する一方で、当の恐竜は地面に崩れ落ちダウン状態。開ききった口元からは涎ではなく泡が溢れ、死んでは

いないがピクピクとその巨体を痙攣させていた。
『さぁ、次はどいつだ？　何匹でもかかってくるが良い』
「オオオオオオオオオオオォォォッ!!　」
大竜牙を突きつけ、宣告。岩鎧の戦士の挑発に残りのブラッドサウルス達の怒りの咆哮が大森林に木霊した。

「さあ、ハベルが惹き付けている間に私達も」
「うむ、そうだな」
ハベルがブラッドサウルスと戦闘―というよりかは一方的な蹂躙劇を繰り広げているのを覗いていたミアハとナァーザは、潜んでいた木陰から素早く抜け出す。
万が一にも見つからぬよう、身を低くして向かった先は窪地の中心。そこに存在する、ブラッドサウルス達の巣の至るところにある〝卵〟をせっせと乱獲していく。
この〝卵〟の入手こそがオラリオから遥々遠地に赴いた今回の目的。新薬の開発に必要な素材であった。母胎たるダンジョンから離れたモンスター達が地上で繁殖する為に、自らの魔核石を削って産んだ『卵』。ナァーザはそれをポーションの素材に利用出来ないかと着眼した。
二人がバックパックに詰められるだけの卵を詰めていく間、ブラッドサウルスは一匹

たりとも近づいて来ない――否、近寄れなかった。

『ウオオオオォォォ!!』

二人のもとに近づけさせまいと、岩鎧の戦士が振るう巨大な大槌が唸りを上げる度に、恐竜達の絶叫と大地が砕ける衝撃音がナァーザの犬耳を打つ。

ちらっと視線を回せば、いつの間にかブラッドサウルスは五匹にも増えていたが、そのうちの三匹が地面に撃沈しており再起する様子はない。

（援護は――全然必要無さそうね。寧ろ私達が卵を集めるよりも先に、ハベルが全部倒しそう）

万一の為に対策していた、背に備えている愛用の長弓（ロングボウ）を用いた援護射撃だが、自分の出る幕は確実に無いであろうとナァーザは確実視する。

なにしろハベル本人の宣言通り、巨大な恐竜達相手に一人無双状態。古代においてはオリジナルこそ迷宮深層域に出現する凶悪なモンスターではあったが、永い年月を経て個体から群体へと魔石（ちから）が分割された地上の子孫（モンスター）達は迷宮のそれと比べ、遥かに弱体化している。

そんな劣化種が複数相手であろうとＬｖ２のハベルからすれば、ボロ切れを纏っただけの亡者も同然である。懸念する理由が無かった。

間もなく卵を詰める作業が終わりを迎える。このまま何事もなく済むとナァーザが

思っていた矢先、それを打ち壊すように不穏な振動音が、獣人の優れた聴覚を刺激した。
「！」
バッとナァーザが顔を上げると、ちょうどハベルが戦闘している地点とは真逆の位置、窪地の縁で大きな影が視界に入った。
「オオオオオオオオオオォォォッ!!」
「ブラッドサウルス！　まずいナァーザ、こっちに来るぞ!!」
やや遅れてミアハも気づく。恐らく仲間達に遅れて今頃巣に帰ってきたのであろうブラッドサウルスは、自分達の巣に踏み入れた挙げ句、片っ端から大切な卵を奪っていくという許されざる所業を犯す不届き者に、憤怒の大咆哮を伴って突撃する。
「ミアハ様！　私の後ろに!!」
ナァーザは主神に指示を叫ぶと同時に、瞬時に立ち上がり長弓（ロングボウ）を取り出す。慣れた仕草で矢をつがえ、猛烈な勢いで迫るブラッドサウルスの頭部に狙いを定める。
後は只、矢じりを掴んでいる左手を離すだけの行為。冒険者（げんえきしゃ）時代から何千と繰り返してきた動作――その筈が、矢が放たれることはなかった。
（動け動け動け動け、動いて私の体!!）
ブラッドサウルスの殺意と憎悪に満ちた紅い眼光を目の当たりにした瞬間、ナァーザの全身を震えが襲い、立ち尽くす。瞳孔は見開き、動悸は激しく鼓動を刻み、視界の色

が滲みだす。
焼け焦げた全身、千切れ食られる手足――脳裏に鮮明に焼き付き決して衰えぬ、忌まわしき恐怖の記憶がフラッシュバックする。
かつて自らの身に降りかかった迷宮の事故に由来する、心傷（トラウマ）の呪縛がナァーザの行動を苛み、阻害した。
必死に自らの体に暗示するように指示を下すも、それを嘲笑うかの如くナァーザの意志とは裏腹に肉体はパニックに陥り、芯から震えだして制御が効かない。
それでもあらんかぎりの意志を込め、やっとのことで手を動かす。放たれた矢は猛烈な勢いで飛んでいくも、しかし震えから照準はブレれてしまい大きく狙いが外れた。
恐竜ではなく在らぬ方向に射ってしまったナァーザは咄嗟に第二矢を射ようとする。だがつがえる間にも、恐竜は既にすぐ側まで急迫していた。
「ナァーザ！」
敬愛する主神の悲痛な叫びが背後から聞こえる。だが眷属は恐怖で身体が凍り付き、回避が不能。群れを相手取っていた戦士が危機に気付き、駆け付けるも間に合わない。
棒立ちのナァーザを、ブラッドサウルスは全身を食らわんとその巨大な顎を開き、鋭利な牙を剥き出す。
呆気なく、その細身の身体が恐竜の大口に呑み込まれる――

――その直前、〝雷鳴〟が奔った。

「――――ッッ?!」

何の前触れもなく、突然の出来事であった。ナァーザの聴覚を、鋭く宙を走る雷鳴の轟きのような音が刺激する。

周辺に響くのと同時に目の前のブラッドサウルスの後頭部で、雷光が炸裂したように激しく眩いた。恐竜は一瞬の硬直を経て、その巨体がゆっくりと横に傾き、ナァーザの一歩手前に倒れる。

「そこの女性よー　怪我はないか？」

「――ッ?!」

地を揺るがす地響きが発生する中、呆然と立ち尽くすナァーザを呼び掛ける声があった。ミアハでもハベルでもない男の声に反応してナァーザが顔を上げると、そこには窪地の縁に佇む、奇妙なシンボルを鎧に刻んだ一人の〝戦士〟がいた。

～～～

「いやーすまないな。見ず知らずの俺を馬車に乗せてくれるとは実にありがたい。オラ

リオを目指していたのでとても助かる」
　ガタゴトと、揺れる馬車の中で戦士が申し訳なさ気に感謝を述べると、ミアハは頭を左右に振って戦士に返した。
「そなたが畏まる必要はない。寧ろ我々の方こそ、そなたへの感謝が尽きないのだ。改めて礼を述べさせてくれ。密林では私の大切な眷属、ナァーザの命を救って頂き誠に感謝する」
「私からも、危ないところを助けてくれてありがとう」
「ウワッハッハハ。そう気にしないでくれ、こうして俺は馬車に乗せてもらっているんだ。助け合いだと思ってくれて構わない」
　主従揃って深々と頭を下げる二人に、戦士は陽気に笑う。
　現在、卵の採集を終えたミアハ達は謎の戦士と共に密林を抜け、一緒に馬車に乗りオラリオへの帰路についていた。
　ミアハが話を聞くと戦士はオラリオへの旅をしていたようで、その道中で広大な密林を探索していたと言う。探索の最中、ブラッドサウルスの咆哮を聞きつけて何事かと駆け付けると、ちょうどミアハ達に恐竜が襲いかかる場面に出くわしたとのこと。
　眷属を助けてもらったミアハは、せめてものお礼にと戦士にオラリオへの同行を申し、戦士は快く了承した。

「さて、改めて名乗ろう。俺の名はソラール。アストラのソラールだ。偉大なる太陽と戦を司どる神の信徒にして、太陽の戦士だ」
「ソラールか、実に良き名だ。太陽と戦……。そなたが所属しているファミリアの主神の名を聞いてもよいか？」
「すまない、それは俺もわからん。かの神の姿と名は伝えられていないのでな。俺達、太陽の戦士も同じ誓約こそ受けてはいるが、普段は各々が個人で動くか時々、共闘をして助け合う程度でな」
「ふむ、姿すら知らない……？　。すまない、失礼だがお主に一つ問いたい。お主は神の〝恩恵〟を刻んでいるのか？」
「噂に聞く、神の〝恩恵〟とやらか？　詳しいことは俺も知らんが、俺の信仰する神は俺達、太陽の戦士に等しく祝福を与えて下さってくれている」
　信じて疑わぬ、純朴に答えるソラールから、ミアハは〝嘘〟を読み取れない。……この時、ミアハは内心少し疑問が生じていた。ソラールの〝恩恵〟を知らない、主神に直接会ったことがない、という発言に偽りはない。
　神々が多数存在するオラリオでは常識的に戦闘を行う者は皆、どこかしらのファミリアに所属して主神の恩恵を背に刻んではいるが、時々地上では神の恩恵に頼らずに闘う部族や戦士がいるという。

ソラールが信仰する無名の神とは、古代の小人族が信仰していたという、架空の女神と同じ類いかとミアハは考えたが、それだと〝辻褄〟が合わないのだ。

（あの時に見た〝雷の槍〟……あれは、一体何だったのだ？）

ブラッドサウルスがナァーザに襲いかかる瞬間、確かにミアハは見た。恐竜を一撃で絶命してみせた、細長く、鋭い、槍のような形状をした〝雷〟を。

魔剣か、ソラールの持つ魔法によるものか。前者はともかく、後者は難しい。魔法種族と謳われるエルフは恩恵がなくとも魔法の行使を可能とするが、それ以外の種族は精霊を除き、魔法の適性がない。鉄製のバケツのような兜を被っているため彼の顔は見れないが、これまでの会話からして恐らくはヒューマンだろう。

「ソラールさんは、どうしてオラリオに。冒険者を目指してですか？」

「笑えるかもしれないが……俺は、俺自身の太陽をずっと探し求めて旅を続けてきたんだ。……前にいた土地では、残念ながら見つけられなかったからな。だが世界の中心と謳われるオラリオの話を聞いて、俺は今度こそ見つけだそうと誓ったんだ」

考えるほど、ソラールに関して色々と疑問が生じてきたが、ミアハはそれら全てを脇に押しやった。ソラールが何者であれ、自身の大切な愛する眷属を救ってくれた恩人なのだ。身なりこそ少し変わってはいるが、眷属と会話するソラールは、ミアハの眼には彼が心優しく、何者よりも熱い意志を秘めていることが確かに見てとれた。

「立派な事だ。そなたの夢は、決して笑い話などではない。そなたの旅の目的が見事、完結出来ることを願おう」
「おおう……すまないミアハ殿。俺の話を笑わなかったのは貴公達を除けば、今まで一人しかいなかった。……ウォッホン。しかし、良いのか？　後ろの『彼』を乗せないで。ずっと徒歩だが疲れないのか？」
　照れくさ気に、息を溢したソラールは馬車の後ろを振り返る。少し離れた後方では、岩鎧の戦士がズシンッズシンッとやや小走り気味に、一定のペースで黙々と馬車を追従していた。ソラールが見た限り、密林を出発してからのハベルの歩みは些かのペースも衰えず、本人が疲れている様子は微塵も感じられない状態だ。
「大丈夫、ハベルの体力（スタミナ）は底なし、どうってこともない。どのみち重量オーバーで馬車に乗せられないから」
「遠出なのだから、もっと身軽な装備に変えた方が良いのでは申したのだが、本人が頑なに鎧を脱ぐのを拒んでしまってな。結局、我々だけ馬車に乗って、ハベルのみ自力で付いてゆく事になってしまった」
　苦笑して説明する二人。全身の重装備に加え、重量級の武器防具を携えたハベルの重さは、到底馬車が許容出来る重量制限を遥かにオーバーしていた。行き帰りが己の足のみだが、幸い無尽活精（スキル）の効果でハベルが疲労して動けなくなる事態の心配は生じない。

順調に進む一台の馬車と、その後ろを歩く一人の戦士は、やがてオラリオにたどり着いた。出入り口の門で検問を経て、都市に入場する。

「ここがオラリオか!!　なるほど、噂に違わぬ活気の熱が実に伝わってくるぞ。……この地でならば、為せなかった宿願を果たせるやもしれん」

『このオラリオに滞在しているならば、いずれまた、貴公と再びまみえる時が訪れよう。その時我の力が必要であれば、いくらでも申してくれ』

「ああ、わかった。貴公とはまた何処か会いたいものだ。では、それまで暫しの別れだ」

ミアハ達に別れを告げ、意気揚々とソラールは立ち去る。群衆の中に消えていく太陽の戦士を見送ると、ナァーザはパァンと両手を打ち合わせ、口を開いた。

「さぁ、私達もまだ新薬の開発が残っている。ホームに帰ったら早速、作業に取り掛からないと」

――後日、ミアハ・ファミリアが開発した新薬、『二属性回復薬（デュアルポーション）』が後日開催される祭りで大変な話題と人気を集め、とある医神が盛大に歯軋りを鳴らしたという。